

漁業資源としての蜜源樹

誌名	ミツバチ科学
ISSN	03882217
著者名	光源寺, 岑生
発行元	玉川大学ミツバチ科学研究所
巻/号	2巻2号
掲載ページ	p. 89-90
発行年月	1981年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



漁業資源としての 蜜源樹

光源寺 岑生

養蜂業界も戦後日本経済と共に発展しつづけてきたが、昭和48年の石油ショックを機に、消費者からは健康食品と認められながら、価格の低迷、主要蜜源であるレンゲ草の激減と、生産者にとっては厳しい試練を受けている昨今である。

近年ミツバチによる「花粉媒介」(pollination)は年々その重要性を増し、認められてきている。養蜂業者も定地、移動養蜂を問わず、耕作者と直接的に又間接的に花粉媒介に関係をもち貢献している。しかし現在のように農政の変動が激しい時期だけに、花粉媒介を重要視するのは非常に危険なものであるからして、やはり蜜源を探る事を主体として危険率を少なくした上で花粉媒介用の蜂をつくるのが、常道手段ではないだろうか。養蜂家は蜜源保護、増殖という目的は誰れもが望んでいることである。しかし従来の蜜源増殖運動は即国の補助金という思考が強く定着している(ただしレンゲソウ、ナタネはこのかぎりではない)が、ここで発想の転換を計ってはどうか。

I 漁業資源と有機質

現代の日本では経済性を第一としたものが、国の政策の全てである。我々のような間接的に大きな効果をなすものは、ややもするとアウトサイドの存在になりがちなので、何らかの形で他の業種とタイアップして考える必要があるのではないかと、そこで考えられるのが近海漁業である。なぜ近海漁業を結びつけたかを記すると現在私が移動養蜂を行っている場所が、北海道後志地方の沿岸で、この附近は過去ニシン漁で

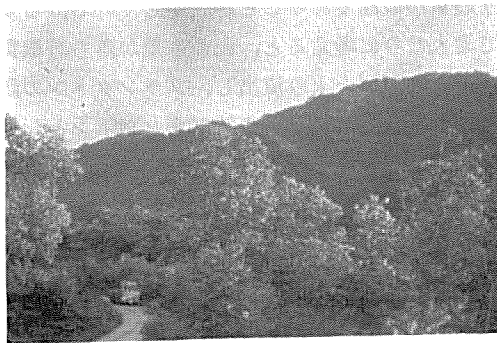


図1 アカシア造林地の開花(北海道, 1974年植林)

栄えた地方であり、又他の根魚も豊富であった場所でもある。この地方の漁業関係者の話では過去に於て沿岸の木を切ると魚が来なくなるとの説があり、沿岸に造林したこともある。他の地方でも沿岸造林に関心を持たれている。又三重県伊勢地方にも同様の話がある。この場合、漁業関係者の言っている沿岸の木を切ると魚が来なくなるとの説は、下記の理由により疑問に思われる。海岸沿いに高い山がそびえていて、山と海の間には人家や耕地その他のものがなく山から直接有効物質が海に流出する場合は上記の理由は理解出来るが、一般の沿岸の場合には山と海の間には人家、耕地その他のものがあり、逆に魚に必要以外のものが流出して意味がなさない気がする。何故ならば昔から河口流域は魚が豊富であることは知られている。それならば河口から何かが流出しないとこの問題は解決しない。そこで考えられるのが石や泥、砂ではない、大量にたえまなく流出するものとなると、有機質性のもものではなからうか。

最近北海道渡島の大沼公園に隣接したじゅん菜沼で、沼に川の水が豊富に流れていたが、河川工事をしたため沼に川の水が入らなくなり、それまでじゅん菜沼で、エビや魚で漁業を営んでいた人々が、やむなく転業したという例もある。海外ではナイル川にアスワンダムを建設したことにより、河口の漁業が衰退しているのも現状である。これらの問題を追求していると、沿岸に木のある山がそびえている場所は魚が豊富で、養殖を行っても病気にならず、成長が早いことが解った。又積丹半島の美口で、ウニ養殖が行われているが、このウニの餌にはイタド

りの葉が最高であることが判明している。ここで素人なりに考えると、山の木葉が落ち有機質性のものが川上より流出し、プランクトンの餌となる場合と、川から直接プランクトンとして海に流出し近海魚の餌となる場合と、想定出来るように思われる。

今日行われている造林事業は、土地の痩せる針葉樹が主体となっているが、針葉樹には有機質分の流出量が少いものが多く、漁業資源としても不適に思われる。反面、広葉樹は落葉し、有機質分も多量で、しかも保水性も良く、土地を肥し、ひいては漁業資源としては最適ではなかろうか。漁業資源には広葉樹が最適であることさえ判明すれば蜜源樹のほとんどが広葉樹である。我々としては漁業資源造林計画の一部として組込まれるように、理由付けし努力すれば良いのではなかろうか。

II 広葉樹と蜜源樹造林対策

漁業資源として、広葉樹が必要であることに「国民的合意」があれば、国有地その他の利用が考えられるので、具体的計画には、漁業関係者、養蜂、鳥類、水資源、農業、林業の各関係



図2 アカシアとミツバチ

者をまじえて造林計画を立案すれば、現状のような経済性いってんばりの自然無視型造林計画は出来ないのではなかろうか。ここで計画があまり他人依存な面もあり、不可能の意見も有ると思うので、私事で申訳ないが私が進めている下記の計画を紹介したい。

針葉樹造林では、広島で祖父の代より現在に至るまで造林して居り、造林には種々な試練を受けている。ニセアカシア(アカシア)についても、1970年より広島で2ha造林し、失敗もし成功もしている。又北海道でも1974年より12ha造林し各種蜜源樹を研究し、今後も8ha造林する計画を持っている。この北海道でのアカシア、トチ造林については、後志支庁林務課、黒松内森林組合、島牧村役場の指導を受けている。造林には各関係部門とコミュニケーションを計り、指導を受けるのが良いように思う。民有林については、トチ、アカシア、シナ等を酒井先生も「ミツバチ科学」の第1巻1号で書かれているように、混植したりすれば良い。又針葉樹造林地伐採は何代か先になるため、境界線のもめごととはつきものである。境界線のトラブルをなくする意味からも、境界線にトチ、シナ等を造林すればよいのではなかろうか。具体的な造林計画については別の機会に述べることにする。

III むすび

上記の問題は国土の8割を山林で占めている我国で、具体的にこの計画が実施されるとすれば、漁業関係だけでも年間に受ける恩恵利益は何兆円となるのではなかろうか、残念ながら現行政では、漁業は漁業で、林業は林業、養蜂は養蜂で、水資源は水資源として分析して考えられている。しかし自然界は全て関連作用しているのであって、単一的な行動は取っていないのであるからして、総合的に研究し、より具体化することにより、我々自然界の恩恵で生活している人間の責任として、「後世への国家的資産」として考えてみる必要があるのではなかろうか。